
きもだめし

神無月 あき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きもだめし

【Zコード】

Z7557M

【作者名】

神無月 あき

【あらすじ】

蒸暑い夏の夜の話。

夏休みになつた小学生は好奇心と虚栄心できもだめしをしたくなるもの。

ある寺裏にある墓場で美少女2人がきもだめしを試みる。
強気な子、弱気な子。

2人で墓場を歩いていく。

そんな2人によからぬ気配が近づいてきたのだつた……。

草木も眠る丑三つ時。

住宅街の外れに昔からある古い寺。その裏には墓石の群れがどこまでも続いていて、遠くの墓石になるほど闇に飲み込まれている。

シーンと静まる空気。時間も時間がだが、人の生きる空間とは別の静寂がそこには満ちている。まるで空気自体に意思があるかのように体に巻きついてくる。静寂の音が大きくなり、耳を貫く。そのまでいると確実に気が狂ってしまうだろう、そんな気配が墓場全体に満ちていた。

その墓場の静寂を崩す微かな音。

「ねえ、あすかちゃん……」

幼い少女の声だった。肩にかかる程で栗色氣味の髪のその少女はきょろきょろと辺りを見渡している。

耳をすまさなければ、この冷たい墓石に吸い込まれてしまう程に細いその声は、もう一人の腰まで伸びた長い黒髪の少女を振り向かせた。

「何？ まりな」

栗毛の少女とは対照的に怯える様子はない黒髪少女は声もはつきりとして返事をした。

「あのれ……なんでこんなとこに私達いるの?」

「…………はあ?」

まりなの言葉にあすかの眉がピクッとつり上がる。

「あなたの為に来てるんだしょ――――――」

「はうう…………」

突然の音の爆発にまりなは余計に縮こまってしまう。

「まりなの怖がりを呪き直してあげよつとしてるんぢやない――――――」

「…………で、でも~、わざわざお墓になんて来なくつても…………」

「こいつ事をするのは墓場つて相場が決まつてゐるよ」

あすかがまりなおでこをトンと突付け。

最近、ここのあたりの噂でこの尊寧寺の墓場に幽霊が出るというものがいる。それは人魂だつたり、異様に足の速い老人だつたり、髪が伸びて襲つてくる女性だつたり、子供の笑い声が聞こえたりと内容はバラバラだが、何かが出るということは確かだつた。そんな噂は人を大いに引き付け、また新たな噂を生んでいく。彼女等もそんな噂を耳にして肝試しに来たのだらつ。

「あ、もひちよつと奥にこぐよ」

「ま、まだいくのー?」

「ぐだぐだ言わずに来るー」

しり込みをしているまりなの腕をあすかが掴んだ、その時だった。

じゅり……。

生暖かい風が微かな音を一人に報せ、彼女等の動きを静止画の様にピタリと止めた。

二人がいる場所からまっすぐのびた細い道の先。その闇の中から何かが砂利を踏みしめる音が聞こえてきたのだ。

その音に心臓を強く握られたかのような表情を見せるまりな。あすかも大きく開けていた口を噤み、遠くを見るように細めた視線で闇の中を見つめていた。

そこに何がいるのか、まったく分からない。しかし、砂利を踏みしめる音は次第にハツキリと耳に届くようになってきて、その何かしらが一人の少女に近づいてきている事は確かだつた。

「…………ま、まさか、き、来ちゃったのかな…………?」

あすかの陰に隠れながら、搾り出すような声で訪ねるまりなに、しかし、あすかはまりなに視線を送ることなく、ずっと闇の方を向いている。

と、その時、砂利を踏みしめる音がピタリと止まった。

辺りに広がっていく静寂の音。夏の夜の生暖かさに汗の玉がじわりと浮き出る。しかし、体の内側は上着を羽織りたくなる程に寒い。何か異様なモノがそこにすると体が感じていた。

「まりな、ちょっと見てくるね」

急に何を言い出すのか、あすかは振り向いてそう言つと、一人で音のした闇の中へと駆けて行ってしまった。

「あ、ちよ、ちょっと、あすかー!?」

それを引きとめようと伸ばしたまりなの手は、一時遅くて空しく宙をかいただけだった。

深夜の墓場の中に一人の少女が取り残された。

「…………ううう………… 人にしないでよおお…………」

まりなが涙目になつてその場に座り込むと、気持ち悪い夜風が彼女を包み込んでいく。

その時だつた。

……じやり。

またあの砂利を踏みしめる音が耳に届いた。しかし、その音はあすかが飛び込んだ闇の中からではなく、反対側、まりなの背中の方の闇の中から聞こえてきたのだ。

「つー?」

声にならない声を漏らすまりな。

心臓の鼓動が辺りに響き渡つて来そうな程強張つた表情の彼女は、ゆっくりと体を捻つてそちらの方を覗き込んだ。

視線の先に広がるのは、やはり果てしない闇。

しかし、その闇の中から聞こえる砂利の潰れる音は確かに大きくなってきていた。

音はもひ田の前にまで迫つてきている。

そして、それは闇の中から現れた。

「どうしたの君？ こんなところで一人？」

人だった。

白いTシャツにダボつとしたハーフパンツをした、まだ若い男がまりなを見つけて声をかけてきた。

この男も噂をきいて、興味本位でここに肝試しでもしに来た口だらう。しかし、彼女等のように臆している様子はなく、全くの余裕で散歩をしているかのように思わせる程だった。

砂利の音の正体がこの男で少女も恐怖から開放される。はずだが、近づく男にまりなはあまりの恐怖だったのか、顔の強張りが未だに抜けていない。

男は屈んで、座り込むまりなの顔を覗きこもつとした、その時だつた。

「…………あれ？」

男は急に体が動けなくなつた。セメントで固めたかのよつにピクリとも動かすことの出来ない体に余裕の表情が消え、にわかに焦りだす。

「ど、どうなつてゐんだ！？」

男が困惑の声を上げた次の瞬間だつた。

ぴた。

何かが男の腕に止まる。白い色の何か。

その何かの感触に気がついた男が自分の腕へと視線を落とす。それと同時、男の表情が怖の一色に染まつた。

「つーーーーーーーー！」

手だつた。彼の腕にあつた白い何かは小さな手。あまりにも人とか離れた色の所為ですぐには手であると認識することが出来なかつた。それ程までに異様な存在。

「うわあああ——————！」

男は叫んだ。叫ぶ事しか出来なかつた。すぐにでもその腕を振り払つて逃げ出したいのに体が動かない。男が今にも気が狂いそうに

なつてゐるのは顔を見なくても分かる。

「ねえ……」

ふつと声が生まれる。ほんやりと不安定な幼声。

その静かな声に男は悲鳴にも似た呻きを止めた。代わりに喉を締め付けられているような擦れた吐息が漏れてくる。

「あなたは…………どうしてこんなところにいるの？」

少女まりながすうっと立ち上がった。

丁度、まりなが男を見下ろす形になる。

「…………幽靈でも、見たかったのかしら？」

冬のよつな底冷えする風が草木を揺らせた。まりなの垂れる栗毛色の前髪も揺れる。その前髪の合間から彼女の顔が覗ける。

口と目。

耳まで伸びた口の端が大きく歪み笑っている口と、辺りの闇の色と同じ漆黒で空洞のように大きく見開かれた目。

その一つが男の両目を見下ろしていた。

男は一時も経たずして、両膝を着き、その場に崩れた。もう一度と動きそうにはない。

「良かつたわね。願いが叶つて……」

まりながぽつりと声を溢す。それに合わせるように生暖かい風が吹く。

辺りにはまた静寂の支配が始まつた。

墓と墓の間の道には、もう人ではなくなつた男と立ち尽くす少女が一人。と、もう一人の少女が男が来た闇から現れた。あすかだ。

「やつたじやない。一人でも出来たじやん」

あすかはニヤつと笑った。

「そつかあ。一生懸命考へてた狩り方だつたんだけどなあ。でもあすかちゃんが手伝つてくれたから出来たわけだし、今のじやダメかもね。さつきの人を金縛りにしたのつて、あすかちゃんと？」

「あ、分かつた？ 固立たないよ！」にやつたつもりなんだけど」

「はあ、でもやつぱりわたし人間は怖くて一人じゃ襲えないよ」

「まりなみたいな幽霊も珍しいよ」

「前よりかは怖くなくなつてきただけね」

「じゃあ、次はまりな一人でやつなよ」

「次つて？ もうここには誰もいないよ」

「いるわよ。さつきからずつとこっちを見てる人間が一人」

そういうとあすかは異様な程に裂けた口の端をニヤリと意味悪く

吊り上げた。

全てを見ていたこちらに狙いを定めて。

終。

(後書き)

2005年
2010年 作成
加筆・修正

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7557m/>

きもだめし

2010年10月28日02時59分発行